

「定有堂オブセッション」

奈良敏行

「定有堂のウォルデン池」 (音信不通) ①

・オルタナティブ、世界の中心に隔たりをおいた、そうでないもう一つのもの、という立ち位置は、定有堂の核となるものだ。すき間に咲く、ということでもある。

・一つのアイデア (思いつき) がここに点火する。そういう瞬間が好きだ。

・「見立て」は、でも心象風景を一変させる

「オースターの「幽霊たち」」 (音信不通) ②

・「我々は我々の真の場所にはいない」という発見

・春からこの「レジリエンス」をテーマとして考えつづけている。

・生きる場を「循環サイクル」つまり「栄枯盛衰」のくり返しと知ることが重要なのだ。いまつらくても、この場がいずれ変化するのなら耐えられる。

・、複数の「語り」の中で、唯一の物語を求めない。物語の併存をそのまま受け入れる。

・人は固定観念をもって生きる。それをオブセッションと呼ぶ。自分が自分であるゆえんだ。

・人は「物語」に閉じ込められる。「物語」の言葉は、既知強制をする。

・言葉と現実がそこをきたす場合、きまって「言葉」が正しい。

「ブック・ビオトープ」 (音信不通) ③

・ビオトープは、バイオ（生命）とトポス（場所）の二つのことばを含む。

・強さは画一的で虚弱さには多様性がみられる。弱さの中にこそ個性の多様性がある。

・人のビオトープという物語

・ブックキシユということばがある。本好き。書物に凝った。堅苦しい。机上の。非実際的な。書物で知っているだけ。

・人の集まりは、とにかくやるという意思をもつ三人がいっづければ持続する。

・ブックキシユの集まりの中心には「本」という光源がある。

・皆が自分の理想を主張し合い、しかも争うことがない世界、それがユートピアだ。

・個人の書棚と異なり、本屋の棚には多種多様の正義がひ

しめき合う。

・ブック・ビオトープというフラジャイルな生態系が、かけがえのない大切なものとして本屋空間に息づく。それを本屋の青空、とよんでみる。ブックキシユのトポスだ。

「柴田信さんのこと」

（音信不通） ④

・普通の本屋とは何か？ それは往来にあることだ。往来ではじまる人との触れ合いの物語、それを「物語のある本屋」として自分のことばで語った。

・わたしは「本屋であることを楽しむ」ことが一番大事で、それ以外はまあどうでもいいことだった。

・「普通の本屋」という言葉に呪縛された人のみが、「普通の本屋」という夢をみる。じつは「解」はない、と知りながら……。

・。小さな本屋が抱く夢など、あまりに個別的過ぎて、あぶくのようなものだ。本筋の大きな出版界の動向となんの

関係もない。このフラジヤイルな短命な夢を、石橋さんは丹念に記録しつづけている。

・「普通の本屋」は主語ではないのだ。柴田さんが、「いいね」と目を細める、その述語が「普通の本屋」なのだ。

「天球の音楽」

(音信不通)

⑤

・わたしは「身の丈」という言葉が好きで、しばしば用いるが、本当には、身の丈のことは、身の丈の延長上で考えている限り、問題解決には思考できない。

「けものみち」

(音信不通)

⑥

・本道からはずれたものを、けものみちという。人の生活道路と生態系を別にした、生き物がふみならした道のことだが、ありえたオルタナティブの可能性として、比喩としても用いられる。

・真つ直ぐに往くというのは、左右の路を選ぶことによつ

て、取りこぼされるもの、ふり落とされるものを手放さない、という決意だ。

・こんな二つの出口を持つ生活が可能だろうか。しかし、本を読んで暮らすというのは、そういうことだと思う。

・読書は深めれば深めるほど人を孤独にする。分かるということとは、自分仕様にカスタマイズしていくということだからだ。

・左の路を選ぶか右の路を選ぶか、この理路は説明できる。しかし真つ直ぐを選ぶということは阿吽の呼吸であつて、説明はできない。

・だから路を進めれば進めるほど、孤独な了解にわけ入ってしまう。この阿吽も比喩的に「けものみち」と名付けてみる。

・楽しいこと、何かいいことがあると期待するから扉を押す。この何かいいこと楽しいことを、「本屋の青空」といつてみたことがある。

・本が好きだというところには、「主題」が見える。一方本が好きな人が好き、には「きっかけ」の多様性がある。きっかけというのは、何かと何かの関係性のことだ。人と人とのことでいえば「縁」という言葉になるだろうか。

・この「きっかけ」に耳を傾け、書棚に反映していくのは、街角の本屋の仕事かもしれない。そして「主題」よりも「きっかけ」、つまり本が好きな人が好きという阿吽を重視する人たちを「本屋の人間」と呼んでみる。

「名乗り」（音信不通） ⑦

・わたしの名乗りはなんだろう。まっすぐ言えば「本屋渡世」だ。ここで、「屋」ということばにこだわる。「屋」というのは、くをもつぱらとする人、という意味だ。てれ屋、はずかしがり屋、いばり屋、とか用いられる。本が好きな人はたくさんいる。でも本をもつぱらとして生きるとしたら、とても世界を狭くするにちがいない。

・世界を語る、本という土俵のうえで。

・見える世界がすべてではない、と教えてくれる人もい

る。この小さな声が聞こえてくるのは、世界が縮減に向かっていることとパラレルなのではないだろうか。この世界は本のビッグバンから始まり、ことばへと縮んでいく。そして音信不通となる。

「リングワンダリング」（音信不通） ⑧

・何らかの原因で方向感覚を失う。そして無意識に円を描くように同一地点を徘徊する。

・この話で興味を引くのは、意識が方向感覚を喪失したとき、無意識のうちに利き脚が歩行に偏りを生じさせ、直進しているつもりで、じつは曲線歩行をしているという事実だ。

・利き脚にかかる重みは本への執着のせいだ。

・本を読むことは輪形彷徨に似ている。現実には立ち還るきっかけを見失いがちだ。

・よく夢の中でも、本を読んでいた。いつも、この一冊の

本を持ち帰ることができれば、すべてが終わるという身震いに襲われていた。

「カフェ「ドロップ」で一夜」 （音信不通） ⑨

・個性を前面に出すゆえに、小商いにはぬきがたい賞味期限がある。十年ともいわれる。他人の個性の最良な部分に触れて、上書きする機会がなければ、輝きが消える。

・嫌なことをみんな拒否していたら、辿りついたところが「本屋」だった

・後先考えずやりたいからやるといのが情念です。

・そして残るものが残ります。店の個性よりも、人の個性が残るのではないのでしょうか。

・定有堂の読書会「読む会」の、テキストを選ぶ基準はなんですか。

『伝えたいこと』の中で語られる、「大きな声でものをいう人間を信用するな」「自分のあたまで考えろ」「本を

読め」の3つです。

・自分の時間で参入することをやめ、目の前の人の時間に自然にスーと入っていったらいいな、と願う。

「物語のない本屋」 （音信不通） ⑩

・『物語のある本屋』（アルメディア）。社会派的な視点で出版をテーマにレポートされている。地域の中で書店がどのように所を得ているかを丹念に探訪する仕事だ。

・「物語」に関心が薄れたのは、その物語が、個性派と同義だと気づいたからだ。差別化と同じ用語だ。

・わたしが好んで使っていた言葉は、「本屋という物語」だと思いだした。これは成功体験と異なり、本屋の人間、十人十色の名乗りに、関心を寄せるものだ。

・近年、本屋がまぶしい。本屋の人間は、引いて生きる道筋に存在する。出て生きるところに「個性」があるのならば、「個性」が消えるところにはじまる「物語」に、ここ

ろが魅かれる。

・なるほど、するとわたしが、ここに反芻しているのは、物語を書き替えたいという思いつきなのか。

・本屋があるのではない、本屋という名乗りが循環を生み出しているだけだ。

・カテゴリーの中にあつてカテゴリーを超えて見せる力がなければ「棚」は死ぬ。本屋空間で、本自体が、そこに「本」が並ぶ理由を明らかにしなければオーラが消える。

・本屋空間に窓がひらけば、そこにあるのは「本屋の青空」だ。

・「物語のない本屋」、それは名乗りを支えられた本屋だ。

・「音信不通」。成長の物語ではなく、縮小へと書き替えられるナラティブな「ものがたり」なのだ。

「退歩推手」 (音信不通) ⑪

・歩みは後退する。でも、手は推す。二つの言葉の組み合わせだが、因果関係を導入すると「技」となる。

・退くになぜ「手」が推すのか？じつは手の位置が動かないので、押し込んでくる相手へのカウンターとなっているのだ。

・変わるものと変わらないものがある。そこにどのように因果関係を導入するかに、人それぞれの生き方の軸がある。

・定有堂は、よく棚の見出しが意味不明だといわれる。本の並びのストーリー性とかかわりなしに、見出しが命名されているのだ。

・棚の本が旋律だとしたら、見出しは和音のようなものだ。

・本当に大切なことは実はつまらない事だ。大きな物語には汎用性がある。だが狭い現場の一点突破力のような口伝

には汎用性がない。だがその積み重ねが街の本屋の雑草力なのだ。

・本屋は読者の判断には一歩退いて関わらない。でも読者と交差する「知」の現在地点は手放さない。

「サウンドバイト」 （音信不通） ⑫

・文化の中心に「ことば」があるという文脈のなかで語られる。

・「ことば」と、指し示されるものが、固く結びついている必要はないのではないか、とだんだん思えてきた。

・本屋の棚は、探すものではない。自分が何かを見つけるのではなく、本が自分を見つけてくれるのを待つ。

・本屋空間で、「ことば」は、「もの」に貼りついたものではなく、逆にその距離を拡張する。

・書棚につけられた短いことばは、「サウンドバイト」か

もしれない。少なくとも案内標識ではない。

・店頭に展開するものは「ことば」へのもたれかけの集積だ。棚にひたすら思いを刻む。

・短いエッセイを読んでいて、引き込まれ、ふと気がついたら、「百年過ぎた」のでは？と錯覚したことがある。一つひとつの言葉がきっかけとなり、アナロジー（類推）が全開になったからだ。「世界は言葉でできている」というのは言い過ぎかもしれないが、本屋空間は言葉でできている。

・「ふとわれに返る」という言葉も一角にある。役に立つ本を探しに店頭へ訪れる。でも時の狭間に陥り、われに返る。人生のリセットが始まるかもしれない。

・人は定められたストーリーに支配されがちだ。本屋の中にはアナロジーの力が満ち溢れている。

・例えば「一冊の本の衝撃」という言葉も一角にある。本屋の仕事にオリジナルはない。みんな自分の感動した出合いの積み重ねだ。二十年ほど前に出合い、いまでも忘れられ

ない言葉だ。そんな「ことば」が、店内に「窓」をつくる。その向こうにあるのは「本屋の青空」だ。

「閉じる物語」 （音信不通） ⑬

・ 閉じた空間、閉じた時間が、なぜ必要以上に無限の時空を感じさせるのだろう。

・ 「未来を知るといふ経験がひとを変える」。閉じた空間とそうでない空間では時間の流れが変容する。ここしばらく、この想念が離れない。

・ ひとつの言葉が念頭から去らないという経験はしばしばある。自分ではこの現象を「オブセクション」と呼んでいる。

・ 思考とは「ことば」なのだ。だから、覚醒はいつも「ことば」で訪れてくる。

・ 両義性が世界にひそむと知ればどうだろう？ この場所ですら「物語」が生成する。物語は結末と発端を知り得たときに

生成するのだ。

「本屋的人間そしてオブセクション」 （音信不通） ⑭

・ 「天井から吊り下がったものがあちこちあるけど……？」

・ 理由はないけど反復し、いつの間にかそんな遣り方が身になじむ。それをオブセクションと呼びならわしている。

・ 本が少ないけど、本がたくさんあるように見える。どういうことだろうか？ 逆にいうと、本がたくさんあるのに、森羅万象と感じられないのはなぜか。本と本とが相乗的に生み出す何かが存在しない、ということだろう。

・ 本と本があるだけではだめで、何かを足さなくてはならない。そう信じるところに、本屋のオブセクションがある。

・ 「本」と「本」が並んでいるだけでは、そこに語りかける「力」は生じない。力は「つながり」と「方向」の拮抗

の上に成立する。本と本をつなげるものは「言葉」だ。棚板に添えてある脈絡のない言葉がそうだ。

・本屋空間がベクトルとして開示されるのは、じつは「なくともいいんだ」という引き算の方向が示されたときだ。狭い空間に「世界」が立ち現れる、

「アブダクション」 （音信不通） ⑮

・オブセクションの強い本は、本屋の店頭では他とつながりにくく孤立するしかない。

・本を読んだから本を売る、この自己循環性の軛（くびき）に本屋的人間の宿命をみる。

・つまるところ、「高次の視点」を求めて読書をつづけているのかもしれない。どんな視点だろうか？

・アブダクションの行方としては、「竹声桃花」という故事をいつも思い浮かべる。石が竹にはねかえる音、あるいは桃の花が開く、きっかけは予期せぬものだが、ある日ふ

と高次の何か（特異点）がひらき心が明らむ。木下清一郎であれば、それは「入れ子」としてだ、と付け加えるかもしれない。

「本を読む夢」 （音信不通） ⑯

・夢の中に登場するのは文字列であって、本の形をしているわけではない。

・の中の文字列を持ち帰れたら、その一冊でこと足りるという考えに、脅迫的にとらわれた。

「残されない探検記」 （音信不通） ⑰

・「音信不通」の話が出て、「相かわらず、人に伝えようという気がないね」と笑いながら言われた。

・いまなら自己言及にしか興味がないと言葉にすることが出来る。

・「ランボオはアラビアに渡って武器商人になったらしいが、わたしはまともに本を売っている」

・ランボオは、残されなかった「探検記」が、なにかしらいいものだ、と言っていたようにも思う。「音信不通」って、そんなことだったのだろうか。

「石橋毅史さんに学ぶ」

（音信不通） ⑩

・「分かりやすい」棚でないのが定有堂の個性だ。一番の理由は、小さな本屋なので、棚を動的に保たねばならないからだ。

・石橋さんの「分かりやすい文章」を模倣できなかったのは、「音信不通」が千六百字で書くという制約を設けたからだ。そうした結果気づいたのだが、文章に「飛躍」が多くなる、また同根でもあるのだが、「言葉」を支えとして考えを紡ぐようになる。これは石橋さんの禁じ手とするところであって、「伝える文章」の許さないところだ。

・町は町内というように「つながり」を含む。街は街角と

いうように風景的なものだ。

・街の本屋。自分の得意を凝縮し、「身の丈」を創出する。

「シンクロニシティ」

（音信不通） ⑪

・人文書も関係性の強い本だ。本を読む人の確信が狭くなるにつれて、本屋の品揃えも狭く深くなる。

・「学び系」というのは外延性のものでなく、内縁性のものであるという意味で用いる。

・光を求めるとしたら「自分でないもの」に出会う必要がある。わたしの場合、「学び」とはそんな自己からの離脱ではない。

・市井の「学び」は本質的にシンクロニシティに基づくことが多い。「似ている」という直感で因果関係を持ち込むものだ。生活者にはなじみ深い引き合い（共時性）の感覚だ。

「柳父章さんのこと」

(音信不通)

②①

・《ものを考えるということの働きは、ことばを組み立て、文を作っていくという工夫のうちにある》

・一言でいえば、「ことば」「文」「思考」に油断するな、ということだ。

・状況の閉塞を「ことば」そして「文」に立ち還って思索し続けたのが、柳父章さんの仕事だ。

・生活はとても簡素だった。一人でいて、さびしくない人だった。

「木を見る、森を見る」

(音信不通)

②①

・何かが終わっている予感がした。森のかたちがいつの間にか変化している、と感じた。じつは変化のなさに自分が飽きて、磁極を動かしてみようとしたのかもしれない。

・小さな本屋の暮しで飽きないためには、どのようにして本の森羅万象という気配を醸し出すかに工夫する。逆にいうと森羅万象でなければ飽きてしまう。

・本屋の現場でいえるのは、不易と流行のモザイク模様で、森羅万象と関わり合いがある、ということだ。

「彼らがいなくなる前に」

(音信不通)

②②

・オリジンから外れたところで成功しても、それは成功とはいえないのではないか。

・本屋の仕事も「ただ本を並べるだけ」だ。

・しかし本当の問題は、いつどこで、どのように、という非言語的な実践がここには隠れている。

・本屋もときたま、取材の依頼をうけるが、わたしは本屋を取材されるのが好きではない。気後れするからだ。この心性は部族の民と同じだといえは理解しやすいだろうか。

「定有堂はどんな本屋ですか？」（音信不通） ㉓

・本の構成は、人文書とアート本をメインに考える。街の本屋の構成は「不易流行」という言葉の「不易」と「流行」のバランスを意識することが大事で、メインの人文書とアート本は「不易」の部分に該当する。「不易」は、昔からの本好きの人たちとつながる分野だ。

・一方、従来の本好きとは別のところから本と出合っている人たちもいる。「流行」の分野だ。

・本の選び方は、一口にいえば「遅れて売る」。

・どこでも買えるはずのものが「ここ」でしか買えなくなる瞬間だ。「待つことの力」だろうか。

・書籍もそうだが、「不易」という範疇はすぐに役立つものではないから、「遅れている」と特性づけることができる。

・つまり、ここでは「遅れている」ものを貴重だと感じる人たちになり代わって選書する。

・多くの本は置けないので、ときどき方位や入射角度を変える。

・人通りが少なくなるといわれるが、はじめから少なかった。で、問題は人とどう出合うかと考えた。多くの人と出合うのは困難なので、「本を必要とする」ひとと出合うという方針が唯一の課題だった。

・しだいに書店は小さい方がいいと思えるようになった。身の丈で制御できることの大切さ、持続可能な形態は「普通」であること、本業からぶれないこと、が身にしてみるようになって、「普通の本屋」という意味を込めて、結局「街の本屋」と名のるようになった。

「減速する本屋暮らし」（音信不通） ㉔

・手のほどこしようないときは、抗ってはいけない。花の咲きように心せくことなく、根に滋養を送りつづけるこ

とが肝要だ。減速することは停滞することではない。ベクトルの向きが変わるだけだ。

・減速することで空気が変わり、形態変化が生じる。本屋とは○○だ、という文脈がおぼろとなり反転する。○○も本屋だ、というふうに。減速し縮小する。縮小したところに生じるものは「気感」だ。この事態を「本のビオトープ」と呼んだ。

・「身の丈」という言葉は昔から好きだが、「昇降開合」が感じられるのは小さな世界だからだ。狭く生きる。「ビオトープですからね」、それになんたって音信不通が旗印なんですから……。

「ミニコミ好き」 (音信不通) ②⑤

・マスコミが大勢を動かす大きな声なら、ミニコミは周囲の少数者に小さく同意を確かめる小さな声だ。人の考えを變更させる声でなく、同じ考えの人と同期していく声だ。

・いきなり書き始めるのが身にそぐう。そのために媒体

(メディア) も自分で用意するのが自然な流れだ。

・「自分くくり」で人と付き合うとき、文集があると便利だと思った。

・わたしは『音信不通』という個人誌を作っていた。砂漠に消えて沈黙するランボオ伝説に憧れていたので、そういうタイトルを選んだのだった。周囲には「本好き」「書くのが好き」という人が多かったので、混ぜてという声が大きくなった。でもこれは沈黙へ向かう個人誌なので、じゃあもう一つ別に作るね、という事で『定有』を創刊した。小部数のプライベートな出来事だった。

・限りなく簡素なつくりなのだが、かつてのミニコミ時代とあきらかに違うのは、書店が刊行している以上、どんな形態であれ、これはパブリックなものだということだ。

・簡素でしかもパブリック、本屋もメディアなんだと知った瞬間だった。気づくの四十一年かかった。誌名を『音信不通』としたのは、しかし、このパブリックもいまではどうでもいいことだと思えてきたからに他ならない。

「店頭雑話」 (音信不通) ②⑥

・ 無為の場所で、無為自然に行う「読書」の風景に胸がときめく

・ 思考は言葉の文脈のくびきの下にある

・ わたしたちに対して現れている世界と、本当に存在している世界とが違っているとする考えが気になるかならないか

・ 「世界」の中にいて「世界」の外をどうやって知るのだろうか？

「特異点」 (音信不通) ②⑦

・ 次元の低いものから、次元の高いものを再現する、というのがプログラムの骨子らしい。

・ 次元が異なるのに感覚的に干渉しあえる

・ わたしたちは「實在」から逃れることはできない。

・ 意識存在でありながら、物質の法則の支配下にある、という二重構造のことを言っている。

・ もうひとつ別の脈絡で売れている『日々是好日』をすめた。こころの青空(すつきり)が描かれている本だ。気に入ったようだった。テーマは足元の「しあわせ」への気づきだ。

「フラジャイル」 (音信不通) ②⑧

・ 「お店の特徴、キーワードは何ですか？」とも聞かれる。「ゆるい」ということでしょうか、と答える。距離が近いので普通に品揃えすれば足りる。

・ お客さんに昨日教わって、今日仕入れる。当然少し遅れることとなる。

・ 本屋はお客さんの「記憶」を風景として残す、数少ない

装置の一つなのだろう。

「遅れて読む」

（音信不通） 29

・ 売れ筋という外発的な動機付けで、ちぐはぐになっていなくて、よくも悪くも一人の身の丈の関心での品揃えが、読み取れる。

・ わたしは日頃、「世界」の中にいて「世界」の外をどうやって知るのだろうか？と自問自答を繰り返す。

・ 「心」のことを知るには、「心」の特異点を越えた彼方から「心」を振り返る必要がある。

・ 「心」は実体ではなく神経ネットワークに偏在するシステムの便宜上の名称だ

「本屋（ほんや）」

（音信不通） 30

・ 本の固まりにそれぞれ中心核があり、それが「窓」と呼

ばれる。

・ 鏡に出合い何かが変わる。言葉に出合い何かが変わる。

「身の丈の本屋」

（音信不通） 31

・ 「往来」は街の本屋の基盤だ。

・ 「身の丈の本屋」って何んだろう？ 日常を大事にする、というか、大事にするものはもう日常しかない、といった気づき、これが「初発衝動」だ。そして暮しのなかのサイクルに本屋が入り、オルタナティブとして本屋を生きる。

・ でも本屋の物語は、「小さな物語」だ。「大きな物語」には状況を正当化する背景が不可分にとまなう。そんな大きな物語の支えなしに成立する「小さな物語」だ。

・ 身の丈に完結している世界を、外部が解釈すると別のものになりやすい。

・ 「身の丈」は「狭い」ということだ。「狭い」に関わる

特性を二つ思いつく。一つは、はじまりの場所が終わりの場所でもあるという意識だ。わかりにくい説明だが、「初発衝動」に終始するということだ。もう一つは、狭いから声が遠くまで届かなくていい。声が大きいと、届かなくていいところまで届いてしまう。

・「自分くくり」は、大きな声にならない。「個性」とは誰にも理解できないものだ。もちろん自分にも。だから「本」を商う。寡黙な人間が饒舌な書物を扱う。日々のたのしさはこの相克にある。

・本屋は書店から特異点を過ぎて生じる。本屋は「人」なのだ。人へとシンギュラリティしていく。

・それは、街の本屋に汎用性は必要ないと気づき、「身の丈」から出ることをやめ、「初発衝動」だけを繰り返して反芻するという意味だ。はじまりの場所がおわりの場所、そんなことを話してみたかったのかもしれない。結果を知ることによって原因が発生する、そんな狭い場所の物語を…

「探求のかたち」

（音信不通）

③②

・「どうして同じ本が数か所にあるの？」と問われた。

・見ているものと見えているものが同じではないという「かたち」に世界への入口の扉を感じる。簡単にいうとそれだけのことに興味があるということだ。

・意識は言語に限定される。人の言語の特徴は「線状」で因果関係を生成する。

「普通の本屋」

（音信不通）

③③

・つまりリアリティを追求する本屋ではなく。アクチュアリティを簡潔に見せる本屋なのだ。本が未来を取り込んでいる生成の現場に立ち会うのが喜びだと言い換えてもいい。

「この先の本屋」

（音信不通）

③④

・わたしは「学び系の本屋」なので、他人の視界にのっか

って考えるのが好きだ。

・「この先の本屋」。成功しなくてもいい、でも「やり直し」が利くこと、そして手持ちの材料を活かす。ここに「この先」の次元がある。

・「評価」（ブランディング）を作り込まない自然体はすがすがしい。

「果敢な本屋たち」（音信不通） ③⑤

・わざわざよいなことをする、そこを「果敢」と呼ぶ。

・「小さな本屋」というと見えてるそのままだが、「果敢な」と形容すると見えないものが重ねられてくる。

・定有堂という「果敢な」というのは「ミニコミ魂」とのことだ。それは何かをするために何かを準備するのではなく、いきなり「何か」をする魂のことだ。

・変えてよいもの、変えてはいけないものを身体的に明確

にすると、立ち位置が単純になり、果敢な立ち姿となる。

・「一箱古本市」。十冊ほど購入した。後で気がついたが昔持っていて、いま手元がない本ばかりだった。でも自分の存在証明を、ここで確かめるような気持ちで、買い求めた。

・「定有堂のレイヤー」（音信不通） ③⑥

・『人はなぜ物語を求めるのか』。これはストーリーは意味をめざすという話だ。「わかる」と思う気持ちは、感情以外のなものでもないという。

・ブックシシユな読書の眼目は、「知」ではなく「未知」に出合うことではないか。「未知」は人間的知見を拡張してくれるからだ。もし人間に壁があるとしたら「知ってるゆえに知れない」という境界性だろう。視座の階層をあげることによってこの壁は俯瞰できる。

・引き算して残るものが青空だ。だから「青空」とは肯定することのコトバ的表れだ。そして身の丈が残る。

・身の丈もレイヤーのひとつだ。逆境の擾乱を身の丈に縮んでやりすぎす選択だ。レジリエンスというのだろうか。

「本屋の青空」 （音信不通） ③⑦

・青空は破壊と創造の境目にある。青空の形容に「抜けるような」ということばがある。視野を妨げるものがないわけだ。晴れ上がるというのは雲がない空だ。でも大気がなければ青くはならない。

・本屋には解放感があるといってもよかったのかもしれない。

・最近「物質は粒子であり、同時に波動である」「物質というのはすごくのろい光」という議論を読んだ。

・この飛躍がじつは「てつがく」なのかもしれない。

・物質は粒子であり、同時に波動であるというのは別のあらわれのようだが一つのことだというのがわたしの「てつ

がく」の謎だ。

・高校生のときの「てつがく」は「果」があるから「因」がどこかにあるはずだという一事だったのかもしれない。

・日々のあれこれが抜け落ちていくと青空の占める量が増える。この「てつがく」に出合えるところは、わたしにはこの「本屋」しかない。そして本屋がそういう機能を持つためには路上と接続している必要がある。日々が遠ざかり光が直進するこの光景を「本屋の青空」という。書物と光は一つことだと思う。

「本が大事」 （音信不通） ③⑧

・「本が大事」ということは人を説得するようなテーマではない。「本が大事」と思う人がいると告げる、それだけで事は終わる。

・世界は体験によって生成されるものであって、わたしたちは世界を体験するわけではない。

・「本」の中で体験を成長させ、外部（マルチバース）を予感することが楽しい。「体験」は「経験」の外部なのだ。

・「本を読む人」に出合って「本のたのしき」が広がる。でもそのためにはすでに本を読んでいなければならない。一味同心の阿吽だからだ。

「昨日までの世界」

（音信不通）

③⑨

・時代はリスク回避のショートラン（売り逃げ）に向かう。今日一日が大事で明日のことは誰にもわからない。こういう未来がはじまっている。日銭仕事になっているのだろうか？

・状況がどう変わろうと、本が好きだから本を並べるだけで一直線に進んで一直線に終わるだけだ。この消息が『音信不通』なのだ。

・「未来」とはいつも「昨日までの世界」のことだ。紅旗征戎、つわものの消えたあとには、昨日までの世界が喧騒

を拭って露出する。

「本の街」

（音信不通）

④⑩

・本屋はいつも読者の半歩先のアクチュアリティを見つめる。

・少し遅れる方がいいのかもしれない。

・本屋の特集を読むのは苦手だ。それぞれの初発衝動がまぶしい。自分のできなかったこと、しなかったことを思い出す。

・あかるい姿の地域の本屋特集を目にし、自分がすっかり縮み志向にあることに気がついた。しかし、思えば縮んだ姿が、もともと本屋的人間としての、おのれの原点でもあった。

「初発衝動」

（音信不通）

④⑪

・本屋は本が好きの人がやっている。「屋」というのは「もつぱら〇〇」と熱中しているという意味だ。ここでは、もつぱら本に熱中している人だから、「ブッキッシュ（机上の空論）」な人ということになる。熱中したあまりその勢いで本屋となる。この「勢い」のことを「初発衝動」と名付けてみた。

・「小商い」は、初発衝動で始めるものだ。だからこの初発衝動という物語の上に、それぞれの本屋の商いがある。

・もう一つは「十年説」だ。初発衝動つまり個性で始めたものには賞味期限があり、ほぼ十年という話だ。定有堂書店は四十年つづくので、ほぼ十年周期で「個性」を切り換えてきた。長く続くということはそういうことなのだ。

・さてここからが「本屋トーク」で、ブッキッシュな話となる。なぜ、個性を切り換えることができるのかというと、個性それ自体が「勢い」のものだからだ。

・《ものを考えるということの働きは、ことばを組み立てて。文を作っていくという工夫のうちにある》（柳父章）

・思念は「ことば」と「文脈」でつくられているという考えだ。つくられているのなら、変更することも可能はずだ。ブッキッシュな本屋の人間は、こういう道筋をたどって考える。

・今日の店頭で常連の方が、うちの二十四歳の息子が今年就職して悩んでいる。職場で自信がもてない、自分を変えなければ、と悩んでいる。どんな本を読ませればいいだろう、と会話がはじまった。「物語」は変えにくいけど「語り」は変えやすいというテーマの本がありますよ、「ナラティブ」という考え方です。少し専門的だと『ナラティブと共同性』（野口裕二）が最新の本ですし、息子さんなら『人はなぜ物語を求めるのか』（千野帽子）がいいですね、とすすめ、ついでに、自分を変革して生きる人たちの「語り」を集めた『かわり方のまなび方』（西村佳哲）も付け加えた。

・本屋の物語を「語り」によって少しずつ変容させる。そのようにして定有堂はこの場所（レイヤー）にある。

・「読む会」は「学び系」だが「結論をつくらない」。勉強会は結論を見出していこうとする。結論が共有できるのは同質な人たちが参加しているからだ。「読む会」は異種で多様の「集い」なので共通理解を求めている。

・わたしは三十年変わらず片隅で、無言で耳を傾けているだけなので、そんな風に見える、というだけの話だ。テキストも売るだけできちんと読まないし、発言もしないし耳学問を積み重ねるだけだ。むろん店頭には反映されていく。そこからがわたしの役割と分別している。

・「日常」に形而上学を持ち込まないという深い反省のもとに、考えを深め合う

・サークルは長く続いて欲しい。ながくつづく集いをみていると、気づくことがある。「主題」と「きっかけ」を大事にしているということだ。集いにはテーマつまり「主題」がある。でも「集まる」ということ自体、本当は大事なことだ。誰々がいてたのしいから参加する、というひともいていいはずだ。

・意見を交換するだけでもたのしいので、結論をつくる必要もない。なまじ結論が明確になると、なにかしなければならなくなつて、会が立ち消えになる。

・往来にあたたかそうな焚火がみえる。ちよつと寄つていつて暖まろうと人が集まる。あたたまつたら去っていく。それで十分。焚火はそれだけのものだ。でも焚火を絶やさないということも大事だ。立ち寄り去っていくひとが、一本薪をおいていけば火は絶えない。むろん焚火守りも必要だ。

・焚火守りについてはこんなことを言っている。焚火とはサークルのことだ。「主題」がなんであれ、とにかくつづけたいからとりあえず参加する。こんな人が三人いれば長く続く。

「見えない世界を見えるように」

(音信不通)

④③

・「ある人の境遇について知りたいとき、その人にまでする質問は何だろう」という問いかけがあり、質問自体が質問者の姿を鏡に写す問いだと面白く思っていた。

・「好きな本は何ですか？」ランボオの『地獄の季節』だと答えた。「なぜですか？」ランボオの「変わり方」に興味があるからと説明した。

・本を読む人生から本を売る人生に「変わった」ということが、ランボオが好きだったことと無関係ではないと思うと少し楽しい。

・ランボオは結局なにかが嫌になったのだ。

・本を読む圏域は強く文脈に支えられ拘束される。本を売るという小商いの圏域には少し違った自由がある。うまく説明できないが、ここにランボオのアフリカの光景が見えるような気がする。捨てて自由になったのは文脈の拘束からだ。

・思考の文脈の拘束性は好きでない。推論するひらめきを重視するアブダクションの方が好きだ。これとこれとは似ていると思いはじめると、文脈の分別をゆるく崩壊させて、現象を自分なりに説明する方向へと扉を開く。

・本屋の棚はこのように作られる。見えない世界を見えるように語るエモーションだろうか。

「本屋の圏域」 (音信不通) ④④

・「本のビオトープ」。本屋の公共圏は、狭さの中にしか存在しないと、あらためて感じる。多くの人の期待にこたえるよりも、狭い半径の圏域を大事にした方がいいと思う。多様性よりもピンポイントだ。

・自分ではすべてが終わっているといいつづけて長い。

・本のビオトープという狭い公共圏で、ゆったり深呼吸してみた。

「読書の彼方に」 (音信不通) ④⑤

・「スモールハウス」そして「オフグリッド」に関心を寄せていた

・定有堂は学び系の品揃えをうたっている

・『勉強の哲学』。ここである「教養」と定有堂の「学び系」は重なるのかなという問いを持った。日常の枠組みから自由になるために読書をしようというところは同じだが、学びの「枠」に導引されそうなのが違和感だった。市井の学びは日常に帰る必要がある。

「具体と抽象」

(音信不通)

④6

・わたしの育った地方は「かくれキリシタン」の殉教の街だった。「信」は個人の生死の狭間にあるものだった。

・具体は殉教の方向だ。いろんな生き方があるのに、それでも狭い道へと引き寄せられる、そんな情動がたしかにある。

・職業人としての読書は歴史意識を求められる。一方わたしは一回性の出来事にしか興味がもてない。

「書けなかった話」

(音信不通)

④7

・本屋に来る人たちは、読書の動機付けを外部から与えられなくても自分で十分持っている。

・路上で路上を考える、それが本屋の人間だと思う。そこではいつも「未来」を語る「本」を待っている。

・店頭（路上）では読者の時間感覚と空間感覚があり、その圏域をはずれたものはアクチュアリティを持ちえない。昨日までの本から、ふっと人々の関心が消える瞬間もある。

「共通理解」のあり場所

(音信不通)

④8

・定有堂教室「読む会」。街にはいろんな人がいる。

「本」を読むという一点で集まっているので、本来意見が噛み合うはずもない。でも「本を読んでいる人」の気配を共有する中に「共通理解」のようなものが阿吽の呼吸で生まれる。それが感じられた頃場が暖まり「ではまた来月」と毎回散会になる。

・結論は出ない。しかしその一歩手前でなにか腑に落ちるものが自分の内へと回収される。

・共同でやる学習は長く続かない。テーマが絞り込まれるほど、しばらくすると路が分かれる。

・そんな読書会が終焉した後にあえてする読書会が「読む会」だ。長年見つめてきてそう感じる。意見をまとめるのではなく、意見を散らす。

・街の読書はいつも実践の経験を前提とする。むしろ自分の身の丈の実践だ。意見を散らしたあぐく引き算したあとに何かが残ったとしたら、そこに「自由」が生まれる。認識の束縛が引き算され、はじまるところの「自由」だ。

・自分の結論を突き崩すために貌付き合わせることとなる。

・わたしは、生き物 (bios) と場所 (topos) の重なり合いが小さな生息環境をつくる、それが黄昏ゆく街の本屋に似ていると思ひ旗印にしていた。でも「bios」を、物語的な生であるビオスと、生物学的な生であるゾーエー (zoe) と区別すると、考えが深化する。

・つまり「本」の存在だけだと「ゾーエー」なのだ。「本」が「人」と融合してはじめて生態系「ビオス」となる。

・わたしの軸足が「読書のビオトープ」へとこのたび少し動いた。人と人が出会えば瞬時のことでも「痕跡」が残る。

「柳父章さんと「語感」」 (音信不通) ⑤0

・わたしは自己言及的に「自己意識」の迷宮に彷徨っていた

・「悪文で主観的な文章だけど、語感だけは確かにある」という評価ともいえない評価だった

・「終わりは相手にあずける」

・自分で理解しきれていないことを書くことで明らかにしてい
ていく、それが自己言及的な文章だ。

・それは「分かりやすい文」とは無縁の営みだと思う。
「語感」が相手に手渡されるだけだ。

「コロナ・ディスタンスな日々」 (音信不通) 51

・定有堂には限られた本しかない。本が少ないと思う人も
いるし、いやとても多いという人もいる。

・「音信不通」は「終わった」という気分から始まる。そ
れは「逆転」の気分だ。マジヨリティとマイノリティの逆
転だ。この逆転が文脈に構造を与える。『何もしない』が
文脈を導いていく。

・「何もしない」ために何かをするということの、自由な
出発（リスタート）が魅惑的だ。何にもならないけど

「本」を読みつづけていいのだと思う。この入り口が「ス
モールハウス」だといったかったのかもしれない。「何も
しない」方向への耽読の始まりだ。

・読むより売る方が楽しいと思うのは、十分「終わってい
る」証拠かもしれない。

「本屋読書」 (音信不通) 52

・ダーウインの「最も強い者が生き残るのではなく、最も
賢い者が生きのびるのでもない。唯一生き残るのは変化で
きる者である」という教訓があった。物事には賞味期限が
あると理解した。

・「変化」の兆しは「内部」には存在しない

・ほぼ完成し尽くしているが、何かが決定的に足りなく思
える。

・好きだからやる、やりたいからつづけるだけ、自分のた
めに灯しているだけだが、知らないうちに他人のためにも

役立っていた。これが破壊的本屋イノベーションだと思う。

・扱う商品の多様化の先に未来はない。「本が好き」という原点に、破壊的イノベーションは宿ると予感する。

・定有堂教室「読む会」のテキストは岩田直樹さんが選定されている。参加者にわかりやすいようにレジ前に並べる。読書会レベルの本なので定有堂の棚の本とは性格が違う。ふと別の世界を感じ、ついでに一冊とお客さんが買っていく。定有堂の出口の印象を高めているのは間違いない。

「本屋トーク (Twitter 抄)」（音信不通） 53

・県外の方も多く、一期一会の話が弾む。なぜこの本がここにあり、この人がここにいるのか、と。

・一冊の本の衝撃。とどこどころ棚に記されている。ひとは本屋に本を探しに行く。でもあてもなく訪れることも多い。きつとなにか変わりたいという気持ちに引かれて足を

運ぶ。自分を変えられる本に出合うこともあるしなかないかもしれない。そして忘れたところに立ち現れる本があれば、それは衝撃の一冊。

・ブックシッシュ (bookish) という言葉が好きだ。本好き、書物に凝る。堅苦しい。学を銜う。実生活に基づかない机上の空論。非実際の役立たない。世間的には愛想なし。辞書にはそう記されている。普通少数派だが、本屋の中では治外法権で多数派に逆転する。ここではただ本屋好きと呼ばれるだけだ。

・街角の本屋の棚づくりには、この土地にどういう読者がいてどういう本を必要としたか人の痕跡(トレール)が必要だ。本が並んでいれば本屋といえるわけでもない。人と人との関係の中に本が居場所を選ぶのだ。

・青空とはここでは強く肯定をうながすアイコンなのだ。本屋は青空。意識の拡張はとも心地よい。なぜ拡張が生まれるのか。言葉は言葉と出合うことによって言葉の言葉を生み出し、割り切れない計算を割り切ってしまう。青空の高みで。

・ りたいからやるという情念にはじまる本屋を理解することとは難しい。本屋はここでは主語ではない。述語なのだ。

「本屋トーク (document 抄)」 (音信不通) 54

・ 本に暮らしのスタイルを求める。大事なものは日常の暮らししかないと感じ本を手にする。しかし、本ではじまる日常がこの世の枠に収まるはずはない。

・ いままで出合わなかった種類の人と巡り会い対話を交わす。会話が弾めばやはり自分の物語が更新され、棚の本も磨き上げられる。

「心模様」 (音信不通) 55

・ 人に興味を持ちその人を知ることとは、その人がどんな本を読んできたか、そしていまどんな本を読もうとしているか、その二つだけで十分に思える。

・ 本には知らなかったことを知ろうとする方向と、知って

いることを崩壊させるという二方向がある。

「本のある暮らし、ただし本屋」 (音信不通) 56

・ スペイン風邪のパンデミックは収束に三年を費やしたというが、新型コロナウイルスもおそらく同様の経過をたどると推測される。三年を乗り切れない人も大勢いるし三年は長い。世界が変わる瞬間をわたしたちは体験している。その体験は分断を深める。知覚のレイヤーが多層化するからだ。そのため移りゆく世界をとらえるグランドセオリーはハイレゾリューションになる。

・ 直近の読者が購入した本を並べているのは、本屋空間に、この地域というよりも往来のベーシックセオリーを、「見える化」したいからだ。

・ 『つながりの作法』という綾屋紗月さんと熊谷晋一郎さんの対話があった。ハイレゾリューションの世界が簡潔にとりまとめてある。本のある暮らしもここまで高解像度で語られることに驚く。そして次なるグランドセオリーはこの「当事者」の場所を抜きには語れないと思うようになって

た。

「本屋トーク（ハイレゾリーション）」（音信不通）

57

・入り口は内部にある。外見は往来にとけ込んで普通がい。
い。

・知っていることはもういい。知らないことに出合いたい。

・それぞれのイリュージョンが生成し、そして固有に生きる。しかしそれは分断のはじまりではないだろうか。

・高解像度はリアルを毀損する。まだ外へは出たくない。

・学び系の人は結論を重視しないのにえきらない。思索系の人は結論を急ぎつなかりを重視する。

・すべてに応える力もないし必要もないと

・初発衝動のぶっ飛ぶ力。スタートを切ったらすでにゴールに入っている。

・いつの間にか周囲はすでに、身の丈の人ばかり。

・読書の痕跡、トレースビリティ。手にしている本をなぜ読んでいるか語れるだろうか。

・結局、言葉は属人性の由来をもつ。

「定有堂の「推し本」」（音信不通） 58

・定有堂は「読む会」という人文書の読書会を三十年以上つづけているので、その関連で概念性の高い本を求められることが多い。いま共通の心象風景は「分散」だろうか。

・結果、「このものの性」（個人性）そして当事者性が際立ってくる。

・個の属性がふくらみ「つながり」が粗になってくる。一人一人の視野の解像度が上がり、ハイレゾリーション

（高解像度）の状態になる。

・わたしたちはいま、閉塞状態の中で「分散」されハイレゾリーションとなった、新しい日常を生きている。ぎつくりした「まとめ上げ」ができなくなったおかげで、はじめて当事者問題をひとつとでなく実感できるようになった。

・本屋で交わされるのは「ちいさな声」だ。未来を論じる場所でもない。出合いが、今日と明日を少し明るくするだけだ。どんな理想をかかげても、人間は必ず未来に過つものだ。今日をていねいに生きる「ちいさな声」を拾うのが本屋の「推し本」だ。

「閉塞と覚醒」 （音信不通） 59

・「覚醒」というのは、概念（言葉）が、暮らしの中に侵入してくる事態を示す。

・ときに、書物に始まる衝撃が訪れる。それが「覚醒」の内実だ。

・適度な読書は健全なことだ。しかしその量が域を超えると、普遍論的に、書物が現実の体験となってくる。

・わたしは旅立つことは好きではない。日常の輪郭があいまいとなり、自己崩壊に引きずり込まれそうになるからだ。

・旅立たないために書物を手放さないのだろうか。きっとそうだと思う。何かを見ないために何かをする。

・書物のノマディズムに思いをはせる。しかしふとした隙に、現実が仮面をかぶって立ち現れるかもしれない。逃げ切れるだろうか。それが問題だ。

・春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことはいのちなりけり

覚醒するものは、そのような「いのち」なのかもしれない。

「何度でもやり直す」 （音信不通） 60

・いろいろなことが、時間に追い越されたという気がする。いつも数歩先に意識を構え、現実の時間は数歩後ろに流れていた。その時間と意識が、同期してきたような感覚だ。

・時間を逆向きに追い越すというのはどうだろう。それが何度でもやり直すということだ。

・読者は「思いがけないものだがじつは求めていたもの」との出会いを求めている

・対象において欲望は実現するので、欲望が満たされないのであれば、対象をリセットすべきだ。

・世が移ろいそして果てに残るのは欲望の原初形態だ。ここから何度でもやり直せる。やり直すうちに、目的は他でもない、自分の根底に向かって歩んでいただけだと気がつく。

・「このものの性」を中心に最近考えているが、先日ある人に「定有」を旗印にしているのですから当然ですよ、と示唆され驚いた。数十年を経て同じ場所に立ち戻っていたのかと理解した。

「このものの性」

(音信不通)

62

・死によって意識は失われるが、その意識をかたちづくり、形態的に支えていた物質は、細いけれどもつながっていく。

・消滅ごとにカテゴリーが上昇し、やがて全宇宙規模のできごととなる。そこからどうなるのだろう。

・わたしたちの宇宙(ユニバース)は、折りたたまれて消滅する。結局ここには、どう考えてもわからないものが、横たわる。この「わからないもの」とは何だろう。

・いつまでもここには正解がない。でも生活者としてのわたしは、「なるほど納得」と腑に落ちる状態に自分を保持できれば、それはそれで笑って死ぬる。

・そこに「へこのもの性」という深淵」という一節があり、なるほど「深淵」というのが述語だったのかと思いついた。わからないけど手の内でこの言葉を磨きつづければ、その先に笑って死ねる青空が開けるような気もした。

「思いの手放し」 (音信不通) 63

・わたしは生活者なので、常々普遍的な真実よりも、自分一個の「このもの性」を重視する。

・真実は普遍の側にあり、実感は「このもの性」としてあらわれる。

・「刹那生死」という言葉があつた。説明して、「現在の瞬間こそは、私たちが経験できるただ一つの生命現象です」とある

・過去も未来も他人ごとで、私ごとは「刹那」のみと理解する。

・「思いを手放す」、何を手放すのだろう。「アディクシヨン」と説明する人もいた。わたしはオブセッションという言葉から逃れられない。固定観念と言ひ換える。

「これまでの本屋、これからの本屋」 (音信不通) 64

・「町の中にあるという風景が欲しい」

・「街の本屋」と言いつづけてきたが、最近は「街角の本屋」もいいなと、少し気が変わりはじめていた。

・むかし本屋全体の行き詰まりをいち早く読み取った柴田信(岩波ブックセンター)さんが、これからの本屋として、「普通の本屋」構想を語った。この真意は誰にも届かなかった。本屋が楽しいということ、本屋で生計をたてるということがどうしても両立しなくなるだろうという危機意識だった。

・十年限定で余生の本屋を営む。とりあえず本は十冊も並んでいればいい。本は売れなくても、人は途絶えることなく訪れる。本屋的人間という言葉が好きだ。「いのち」

を使い切る、その手立てとして「本」しか思いつかない人間のことだ。

「三砂慶明さんの『千年の読書』」 (音信不通) ㊦

・「私は本に人生を何度もたすけられてきた」

・「耽読者の家」。家中が蔵書に埋もれ、数人の住人が読書しつづけるだけの話だった。それだけの設定なのに、この読書は千年つづくと思われた。

・三砂さんがいいなかったのは、じつは本が精神を駆動するその限りにおいて生きられる、という秘密だったのかもしれない。

・「フロア」というのは「二つの活動に深く没入しているので他の何ものも問題にならなくなる状態」で最適経験（自分の最高の状態）ともいうらしい。流れにのっている感覚だ。『千年の読書』にはそんな流れがほとばしっている。

・読書の体験とは、読んでいるそのときの精神の駆動（高揚感）そのものなのだ。三砂さんはその「駆動」を自在にあやつる。

・読書は一時的な快楽とは異なり、読後に人を変成させる力としてある。

・本にたすけられなければならなかった人間は、どこかで自分自身の初期設定そのものを、フロアの世界へと変更（転回）させた人間だ。

「二つの書評」 (音信不通) ㊦

・『つながりの作法』。身体内外の情報を、細かく大量に拾いすぎて、外の世界と「つながり」にくくなった、という気がする人に読まれている。

・最近、本屋の店頭で感じるのは、いままでの、常識を主語とした世界がひっくり返り、身体感覚を主語にした本が求められはじめている、ということだ。この流れの入り口に『つながりの作法』という本がある。

・当事者を主語とすることは、「当たり前」という思い込みの同調性から離れて、一人一人異なった、存在の一義性の方に身を寄せて主語とすることだ。

・わたしたちは「見えるもの」に惑わされ「見えない」が本来重要な「生命実物」を忘却している。そのことによって苦しみの中にあるのならば、その誤った「思い」を手放せばいい

「読書のバイアス」 (音信不通) 67

・人の個性と本屋の個性が、読書のバイアスという面で重なり合う。

・驚きのない読書はおもしろくない。

・驚きというのは、こうだと思っていたがじつはこうだった、というところに生成する。

・読者の方に向かって選書しても売れない時代が長い。売

れないと逆に自由が生まれる。バランスの中に売れるきっかけは失われ、バイアスの中に共感購入という余地が生じる。

・「独学」というのは好きな言葉だ。関心が狭いので、よいなことには関わりたくないからだ。

・薪が燃えて灰となる。この因果律を切断すれば、薪(生)と灰(死)が別個にあるだけだ。

・結論は因果律を切断するということだ。

・一個人のアブダクション的な話だが、本屋なので、そのまま本屋のバイアスとなって棚の一角を占有している。

「権力を取らずに世界を変える」 (音信不通) 68

・石橋さんにとって、「本屋」とは、権力を取らずに世界を変える生き方だった。身の丈から世界を撃つという構成だったのだろうか。

・ 巨大な合意のもとではなく、千人単位の小さな合意で、ユートピアは築けるという意識の転換だ。

・ 石橋さんは「共有地」という、あるようなないような言葉は使わない。「本屋な日々」と言う。具体的な本屋の人間の生きる日常があるだけだ。

・ 石橋さんの記録は、既存のシステムの中に居場所を見つけられなかった人間の、七転び八起きの話なのだと思う。本屋に向けて「もっと強く願っていいのだ」という励ましなのだ。

・ 「本屋」は、「本」を手立てとした「やり直しの形式」なのかもしれない。

「記憶を折り畳む」

(音信不通)

69

・ 仕事と生き方をどう考えたらいいのだろうか？と問いかけた若者がいた。いずれ転身の時期が必ず来るから、「やり直せる」ということをテーマにしたらいいいのではと答えた。そのためには、人のつながりを豊かにしておくのが大

事だろう。

・ ミニコミを作る。人の集まりを作る。すべてはそこから始まった。それから長い時間が過ぎ、たくさんの人と出会いすれ違った。ほとんど一期一会だが、記憶に刻まれる事柄も多く、その記憶が折り畳まれて今を生きる。

「ブックカフェとカフェブック」

(音信不通)

70

・ 「カフェブック」。二、三人でカフェに行き、その高揚感を共有するための本。

・ わたしはカフェに置いてある本は読まなくてもいい本だし、三十秒位で内容の全体像がイメージできればとてもいいと考える。つまりそれだけ個性の強い本でなければ、カフェというステージを支えきれないはずだ。

・ わたしは、カフェでは、特定されないとどこかにいるようでどこにもいない、読者を想定する。

・ 小さな本屋は個性派とよくいわれるが、個性には賞味

期限が必ずくる。

・ここ数年定有堂は「本のビオトープ」と名のりを上げて
いる。これも本との焦点の合わせ方の一つだ。バイオ（い
のち）とトポス（場所）の意味だ。そしてその表象の仕方
において本が人と人をつなげていく。

・ビオスはバイオの語源。ある特定の個人の有限の生命。
ゾーエーは個体の分離を超えて連続する生命。ゾーエー的
生命はビオスの限定によつてはじめて個別化される。つま
りトポスはその限定性によつて生きる拠点となる。そして
その拠点の素材が「本」であるとすれば「本のビオトー
プ」が現象する。

・結局「本の品揃え」の根底には「潜在性」（リアリテ
イ）と「現働的」（アクチュアリティ）の焦点への適応調
整というものがあつたのかもしれない。賞味期限を免れる
ためには、このような「生成変化」の意識が必要だったと
思える。

「固定観念」

（音信不通）

71

・オブセクションとは観念に取り憑かれることで、妄想、
強迫観念の意味だ。わたしはこの言葉の使い勝手がよく、
思考のアイコンのように多用している。私的衝動の初発性
ともいえる。ただ訳語としては「固定観念」を選びとる。
現実には根拠はなく観念レベルの衝動なのだ。

・ファム・ファタルが運命を狂わせるのは、そこに非対称
性があるからだろう。そぐわない、手が届かないとわかっ
ているから、慾動が立ち上がる。

・わたしのオブセクションは解答のないものに向かう傾向
がある。

・「可能性の魔」といつていた。四角い三角のようなもの
だ。事実上ありえないが権利上ありえる。この次元ではあ
りえないが、異なる次元ではありえる。しかしその次元は
わたしのものではない。ここで何かが発火する。

・本が好きという事は「概念の魔」に取り憑かれていること
だ。「どうして超越的なものが超越的でないものの『中』に
ある』ことが可能なのか」という一節が気になった。解け

ない謎だが、執拗に念頭を去らないオブセッションの一つだ。

・『なぜ宇宙は存在するのか』。存在論的な問いを共時的な極微・極大の視点、そして通時的な宇宙の発生と消滅のスケールで受け止めてくれる。結論は「生命は星クズ」でできているということだ。

・オブセッションに終焉はなく、何かと溶け合うほかに外部へのくぐり抜けは存在しないと気づいてしまった。生成変化へ還るほかない。

「闇の奥」 (音信不通) 72

・定有堂は、「意味」を求める本を、並べる本屋だ。

・定有堂は「意味」を求める本屋だといった。「意味」とは理念と現実との相互干渉のことだ。そこに相互承認があれば「意味のあるもの」となる。

・「規範」から「逸脱」という非意味化(生成変化)

も、いま現在是最前線に位置する意味のある営為なのだ。

「読書の四面体」 (音信不通) 73

・実存とは死ぬという自分のありようから目を背けないでここにありつづける存在の仕方だ。この「実存」を描いたものとして、『スモールハウス』のことを、何度も語ってきた。インフラなどの定常世界を拒否して、孤絶した生き方と住まいを語る本だ。

・本のことしか頭にない。現実世界に生活の占める処は最小なのだ。なぜそんな単純さへ追い込まれるのか。

・生活は簡単な方がいい。任意に生きる方がいい。実存の気づきは「規範」から「逸脱」へと向かう。

・本を読むと知らないことが増えるばかりだ。

「本屋の「このもの性」」 (音信不通) 74

・「なぜかわからないがこうしてしまう」、そのことをわたしはオブセッション（執着）と言い習わしてきた。わたしの解釈では、コナトウスとはこの執着なのだと思う。欲望と言ひ換えることもできる。

・観念を日常性として生きよう、というのが久しく定有堂のテーマ

・日常に観念を導入すると生き方はオルタナティブなものとなる。

・簡単・シンプルなものほどじつは観念性と深くかわる。

・「欲望は原初形態において対象を持たない」というのが大きな結論だ。この欲望はコナトウスの別名である。

・「このものの性」というのもつかみどころのない言葉だが、コナトウスに執着し現動させようという意志かと思える。

・「このものの性」と「コナトウス」、わたしにはうまく説

明できない言葉だが、この周辺をめぐって本屋の中を整えてみたい。

・わかりにくい本屋話になったが、生きる力は「秩序」の中ではなく「逸脱」の中でこそ発揮されるという結論だ。そして本は人を「偶有性」（個体性）の肯定へ誘うものだと考える。そこに「小さな一冊の衝撃」がある。

「独学孤陋」（音信不通） 75

・『どこでもいいからどこかへ行きたい』（Pha）『はたらかないで、たらふく食べたい』（栗原康）『現実脱出論』（坂口恭平）いずれも即答解決の本ではない。むしろますます分からなくするのではないだろうか。

・「分からない」という事柄との出会いが、次の読書を求めるのだと思う。暮らしの日常の中で、分かりやすい結論を掃き捨てることのくり返しの中で、知らぬ間に次の形態へと変化していく。

・独学は評価を求めてはならない。

・整理整頓された思考の技法に巻き込まれるのは好きではない。結果にとらわれると結論に支配される。手助けを求めると人の通念にとり込まれる。

・学ばず学ぶというストリート（往来）の生き方に執着し続ける。本屋は路上（地べた）に生き方を探す小商いなのだ。評価を人に委ねてはならない、ということをもいつも思う。

「ドウルーズを読む」

（音信不通） 76

・わかる事よりわからない事の方に心が惹かれる。

・石も人間も同じものだとうるうズはいう。

・分からないことが魅力、これもいつものオブセッションだろうか。この言葉は自分の観念のアイコンのようなもので、反復して用い続けてきている。今年に入って、このオブセッションは「欲望」の別名なのだと思うに到達しようになった。

・そして、命には限りがあるという観念が、ようやく自分に追いついてきた。

・ドウルーズを読む、でも何一つ理解できない。この理解できないということ、人と共有してみたいという気持ち、なんとなくある。

・知っていたと思っていたモノが、ある瞬間から見知らぬモノへと変貌する。

・モノでなく概念が異化していくのだ。むしろその前提には世界の墜落がある。

・本屋なので、概念の代わりに、書物を積み上げていくことはできる。

・「このものの性」「此性」について、それは一期一会のことだと語る人（山内志朗）もいて、心に染みる。

・反復は同一的ではない。少しづつずれて反復する。その「ずれ」の一瞬が一期一会なのだ。

・ドウルーズの世界が異化する根本は、多数者と少数者の垣根を大きく変更する点にも見られる。

・ただ読むだけだ。結論は外部からやって来るものだと思っている。

「ワクサカソウヘイとドウルーズ」

(音信不通) 71

・心に流動化が起こり、変容する物語として「音信不通」の刊行が始まった。

・流動したものは「形のない方へ」という反復する思いなのかもしれない。

・わたしは、分かる事だけを自由に我田引水して、それで良しと決めている。自分の中で反復するものにしか関われない。この傾斜を「形のない方へ」と呼び慣わす。

・ドウルーズはメタレベルのものをオブジェクト・レベルへ落とし込んでいく。

・わたしは「学び系」なので、真剣に我田引水に切り取ってしまう。結局分かる事だけしか分からない人なのだ。

・本屋現場の話だが、「書店」(空間)↓「本屋」(人)とレイヤーを考えつづけてきた。例えば言えばわたしは「書店」から孵化した「本屋」だろう。しかし既に「本屋」から孵化した何かが未来のレイヤーとして出現している。

・本を売る、そしてその原点は？ とオリジナルに遡って考えていたら、すでにシミュラクルの時代に入っていたのかもしれない。

「三砂慶明さんとの一夜」

(音信不通) 78

・三砂さんは「読書」と「読書会」から始まるものを熱意を持って語る。ここからなにかが始まっていいはずだし、現に始まりつつあるようだ。

・読者より半歩先んじて仕入れるが、読むのは数歩遅れる

のがわたしの習性だった。仕入れて人に勧めるが、読むのは読んだ人に勧められてからだ。

・山内志朗『目的なき人生を生きる』。個には概念規定がない。だから目的もない。「形相の中に目的はない」「目的が後から現れる」「欲望は原初形態において対象を持たない」という主張なのだ。

・本を読むという三砂さんの欲望は、原初形態において本当は対象を持っていない。でも、本抜きで人生が幕を開けるはずがない、という三砂さんのこの可能性の魔にかける意気込みは、きっと人を動かすだろう。

「沫雪に寄せて」

(音信不通) 79

・《淡雪の中に顕(た)ちたる三千大千世界(みちおほち)またその中に沫雪ぞ降る》

この「うた」の正確な鑑賞はできないが、入れ子構造に外界を見ている点に興味を持った。淡雪の降る「日常」世界、そして沫雪の降る「本屋」空間、という風について連想してしまった。「本屋」はどのように異空間なのだろう

か？

・入れ子構造に世界を見ている人が、「本屋」をそのようなものと思えば、「本屋」はそのようなものとなる。

・本屋を始めるとき、あるイメージがあった。広大な砂漠に一夜にして都市が生まれ、その後また一夜にして砂塵にかえる。これが自分の沫雪だった。

・「沫雪」。生き急ぐ実存の時間の流れと空間のゆがみがここにある。

・本屋は閉じた空間だと思う。「淡雪」とつながっていると思ひ込もうとするが、やはり少し違うのだと思う。

・「淡雪」の日常を踏みしめること少なく、「沫雪」の世界に遊びつづけた。

・本屋が必ずしも「沫雪」の世界だというわけではないが、少なくともわたしにおいては、「どこかに行かなければ…」という焦燥につり合った、日常とはひとつ違った「沫雪」であった。